

教育委員会会議次第

平成26年9月5日（金）15:00

教育委員会会議室

1 開 会

2 案 件

(1) 協議

協議① 「図書館協議会について」

(中央図書館庶務課長)

(2) その他報告

その他報告① 「平成26年度 全国学力・学習状況調査の結果について」

(指導第一課長)

3 閉 会

教 育 委 員 会 （ 定 例 会 ）

- 1 開催年月日 平成26年9月5日（金）
- 2 開催時間 15:01～15:47
- 3 開催場所 教育委員会会議室
- 4 出席委員 古城和子（委員長） 吉田ゆかり シャルマ直美 伊藤一義 彌登 章
垣迫裕俊（教育長）
- 5 事務局職員 教育次長 岩渕 英司
総務部長 小澤 周三
学務部長 花本 潤一
指導部長 渡邊 義隆
教職員研修・企画担当部長 大庭 正美
生涯学習部長 宇佐美 健次
人権教育担当部長 大竹 順司
総務課長 平野 義人
企画課長 松成 幹夫
施設課長 佐村 良夫
指導企画課長 今村 剛志
指導第一課長 弥永 和利
指導第二課長 平池 秀幹
特別支援教育課長 入尾 忠之
教職員課長 太田 清治
学事課長 吉竹 直人
学校保健課長 安藤 光春
生涯学習課長 梅下 勝己
教育課程担当課長 河村 信孝
中央図書館庶務課長 嶋田 直紀
- 6 書 記 総務課庶務係長 田内 淳也
総 務 課 上野まさえ
- 7 会議の次第 別紙のとおり

教育委員会会議録（平成26年9月5日）

1 開 会

15:01 古城委員長が開会を宣言

以下の案件を非公開にすることを議決

- ・協議① 「図書館協議会について」
- ・その他報告① 「平成26年度 全国学力・学習状況調査の結果について」

2 会議録署名委員の指名

古城委員長が会議録署名委員に、シャルマ委員と彌登委員を指名。

3 案 件

(1) 非公開案件

協議① 「図書館協議会について」

本議案の内容を中央図書館庶務課長が説明。

〔説明要旨〕

- ・図書館協議会委員の公募（案） 等

吉田委員／「図書館協議会委員公募」について、公募は以前から行われているのか。また、17人の委員がそれぞれの団体からの推薦により選任されているが、その推薦との関係についても伺いたい。

中央図書館庶務課長／公募については、北九州市基本条例において、付属機関の委員を選任するにあたり、公募により選任された委員が含まれるように努めること、と規定されており、また、他の審議会等についても公募委員が設けられていることもあり、今回から新たに実施するものである。今までは、関係団体からの推薦のみで選任を行っているが、その関係団体の推薦とは別枠と考えている。

吉田委員／他都市における状況はどうか。

中央図書館庶務課長／他の政令市の図書館協議会においても、徐々に増えている状況である。

伊藤委員／募集人員が2名となっているが、例えば、2名しか応募がなかった、また、適任ではなかったという場合は、1名のみ選任ということも考えられるのか。

中央図書館庶務課長／適任者がいない場合は、2名以下ということも考えている。

伊藤委員／そうであれば、「2名以内」と表記したほうがよいと思うのだが。

総務課長／そのように表記するようにしたい。

古城委員長／図書館協議会委員の所属団体について、委員が所属している団体は前回と同じなのか。

中央図書館庶務課長／ここ何回かの任期においては、同じである。

垣迫教育長／平成22年の9月に自治基本条例ができており、現在の任期を務めていただく委員を選任する平成24年には条例があったことになる。その時に公募しなかったのは、いろいろな審議会において、市が委員を指名するが、それとは違い、団体からの推薦をお願いしていることから、公募に近いというニュアンスがあると

理解してよいのかなと思う。それに加えて、団体の推薦とは別に市民公募の委員を入れることになる。

そこで、委員の選考をする人が、中央図書館長、中央図書館奉仕課長、生涯学習部長というのは、内部のみで決めたと見られかねない。そのため、例えば、図書館協議会の会長に入っていたなどしたほうが客観性が出るのではないかと考えている。

中央図書館庶務課長／委員選考の審査員について、外から見たときに誤解される恐れはあると思うので、検討していきたいと思う。

垣迫教育長／私が保健福祉局長のときに、国民健康保険運営協議会の委員の選任を長らく市が指名で行っていたものを、公募委員選任の要望があったこともあり、昨年入れることとした。その時の選考委員の会長は、国保協議会の会長で、市の職員ではない。きちんと説明するためにも、外部の方が入っているほうがよい。

中央図書館庶務課長／図書館協議会の会長、副会長と相談して、可能な限り入れたいと思っている。
シャルマ委員／2名以内で公募されるということに関して、方向として素晴らしいことだと思っている。

そこで伺いたいのだが、既に17人の委員の方がおられ、さらに2名以内で増えるということで、最大2名増えた場合、19人での協議ということになる。しかし、19の方が集まったの卒直な意見交換は、あくまでも人数的な面からだけだが、発言しにくい雰囲気になるのではないかと、活発な議論が行われにくいのではないかと考える。全体の人数について、今後検討する予定はあるのか。

中央図書館庶務課長／現在の17人の人数でも、意見が出にくい、発言しづらいと言われる方がおられるのも事実である。例えば、推薦いただいている団体が同じ場合は、交代で選任するなど、検討していきたい。

古城委員長／今度の任期が平成26年11月30日までであるため、それまでに議論しやすい環境を検討していただければと思う。

中央図書館庶務課長／12月が改選時期となっているので、今後、推薦いただいている団体をお願いに伺うこととなる。その際に、いろいろと相談したいと思っている。

協議終了

その他報告① 「平成26年度 全国学力・学習状況調査の結果について」

指導第一課長が報告。

〔報告要旨〕 以下の項目について報告。

- ・実施学年・調査内容
- ・調査日
- ・結果の概況 等

古城委員長／学力検証改善委員会について、どういう方たちで構成されているのか。また、昨年検証した結果、今年度の子どもたちの学習にどう活かされているのか、昨年の検証結果と今年度の活動について伺う。

指導第一課長／学力検証改善委員会は、年度、年度で組織しているものである。委員長、委員については、昨年度は、福岡教育大学の教授で、それぞれ、国語、算数など、教育に長けた大学の教授を招聘している。そして、PTA協議会の会長、学校現場からは、小中学校からそれぞれ3名ずつ学校長に入らせていただいている。そして、教育委員会が事務局として入って組織している委員会である。

委員会の中身については、学力テストの結果を受けた事務局の分析について、事前に渡している資料に沿って、それぞれの立場からポイント、ポイントで意見をいただく。そのポイントは、例えば、正答率の分布状況、各教科の領域・観点から、教師の学習指導や研修、児童生徒の生活・学習習慣や自尊感情や規範意識などであり、方向性がしっかり示されているのかなどを検証していただいている。

スケジュールとしては、まず、10月の初旬に学力テストの結果を受けた事務局の分析について意見をいただく。そして、いただいた意見などを各学校に周知し、その後、学年末に再度委員会を開いて、その後の経過を報告し、次年度に向けた施策をまた考えていくこととしている。

古城委員長／学力検証委員会の議論を経たものを学校現場にフィードバックするときは、授業に反映させることなど、具体的な内容になっているのか。

指導第一課長／そういったことも含めた内容になっており、学校に対応していただくこととしている。

古城委員長／それは、例えば、授業において、この学年についてはこういうことについて力を入れてほしいということなのか。

指導第一課長／学年はもとより、それぞれの教科の弱いところに力を入れていただくことも含まれている。

古城委員長／共通する取組みはないのか。

指導第一課長／これまでも、学力向上プランを作っている。ただし、作成、周知で終わっていたため、プランを改善したもの、つまり、学力テストの結果を受けて、各学校がどういった取り組みをするのかを作成していただくこととした。そして、作成されたプランを教育委員会に提出していただき、それを点検して、学力テストの結果が伴っていない学校については、指導主事が訪問するという形にしている。

古城委員長／学校現場に向けて、頑張りなさい、と言うだけでは、あまり役に立たないと思う。やはり、北九州市全体でこういう方法で頑張っていこうという方法論、そして、具体化されたマニュアルが必要だと思うのだが、各学校個別の対応ということなのか。

指導第一課長／各学校の児童生徒の各教科における課題について、領域や単元からの具体例を見せて、こういった誤答例が非常に多いため、授業の中でこういった指導をしてください、と各学校に具体的に示している。

指導部長／学力検証改善委員会については、学力テスト各教科における本市全体の課題について、それぞれの専門的な見地から検証を行っている。また、各学校における自校の課題についても、そこで話し合われる。

昨年度においては、その検証の結果から、本市全体として、書く力、読む力、読み込んでまとめる力が足りない、大きくはこういうことが足りていないため、授業の中でこういうふうに指導していただきたいと各学校に示した。それは、各学校から教科の担当が出席する国語や算数の主任会などでも伝達を行う。そして、例えば小学校であれば、自分の学校では、6年生の時にこれだけしか力が出せなかった、ということは、1年生から5年生までの間にこういったものが足りない、だから、授業の中で、もう少ししっかり読ませて、まとめをするといったことを意識する、という検証を行い、全教員で共有している。

徐々にだが、そういったことが授業に活かされてくると思う。ただし、学校によっては、生徒指導の問題、クラスによる違い、また、今は、子どもが前を向いてしっかりと先生の言うことを聞くなど、そういった課題もあるが、その中でもしっかりできることをやる。それは、各学校が、自校の学力向上に向けたプログラムを作成し、授業に活かすことで実践している。

今年もそのような形で、昨年できていないところも含めて検証していく。

古城委員長／学力検証改善委員会は、何年間くらい行っているのか。

教育課程担当課長／平成19年度の全国学力・学習状況調査が始まった年から、この委員会を組織している。

古城委員長／毎年検証していく中で、成果が得られているとは言い難い状況である。やはり、検証の仕方等を見直すことも必要なかもしれない。

教育課程担当課長／学力検証改善委員会からの指摘は、率直に受け止めなければならないものばかりで、それを学校に伝えているのだが、その伝え方の問題、それぞれの学校の教員1人1人まで十分伝わっていないのではないかと感じている。

古城委員長／学力向上は、待ったなしという状況だと思う。全市を挙げて学力向上に取り組むというときに、この学力検証改善委員会の検証結果だけでなく、何か他の手立てを考えなければならないのではないかと。

この学力検証改善委員会の報告は緻密に行われていると思うが、他都市では、家庭学習時間を学年プラス10分つくる、授業が始まる前に自習時間を設けるなど、学校を挙げての取組みを全市的に行っている。北九州市も、全市的な、小学校、中学校を挙げての取組みを考えていかなければならないと思う。

また、学力テストの結果について、福岡県平均は全国平均より低い。しかし、県内において、福岡市は高い一方で、北九州市は低く、福岡県の平均を下げているということを知ることがある。

そのようなことから、外部からの意見だけではなく、教育委員会、学校を挙げて、どうしたら学習習慣がしっかりと身に付くのか、そのためにはどうすべきなのかなどを考えて、中期計画を作成し、それに沿って実行し検証をしながらその成果を見ていく、といったようなことが必要なのではないかと。

指導企画課長／学力検証改善委員会において検証いただくたき台は、全て教育委員会で分析し作成したもので、その中身は、この問題のこういうところが弱いから、こうい

った教え方をしましょう、といった指導方法も含まれており、学力検証改善委員会においては、その分析に誤りがないかなど、対外的に出すにあたってチェックしていただいている。また、家庭学習時間が足りないということが複数年にわたって検証結果として出ていたため、今年度からの新規事業として、放課後に補充学習を行う支援策を新たに開始したところである。

委員長の指摘は、そのとおりだと思っているが、学力検証改善委員会にすべて一任してはならず、教育委員会でしっかりと現状把握、対策を考えている。しかし、なかなか結果が出ていない状況は、由々しき事態だと思っているので、これまでの何が悪かったか、今後どうしていくのかについて、改めて、議論の場を設けさせていただきたい。

彌登委員／現場を見ていると、北九州市の問題点はある程度見えていると思う。大きく言うと、山が2つある。冒頭の説明において、無回答率が高いということがあったが、頑張っている子がいる一方で、無回答率が高くなると、平均点は上がっていかない。

したがって、無回答率が高いという山をどうするのか、この対策で平均点は上がってくると思う。しかし、これを北九州市全体で捉えてしまうというのは、そうではないと思う。平均点以上の学校もあり、80点を取る子どもに90点を取らせるよりも、0点を取る子どもに40点、50点を取らせるほうが、調査結果を上げるだけということであれば、そういう方法論もあると思う。

先ほど、改めての議論の場という話があったが、教育委員会として、学力向上を目標に、その目的、手段等、議論の場で合意されたことを学校現場の方々にお願ひして進めていくということができれば、また、全教科を一斉に上げることは難しいので、今年は国語A、来年は国語Bなど、調査結果を上げる方法はいろいろあると思う。やり方によってはいろいろあると思う。教育委員会、学校現場が一丸となれる方法を協議したい。

指導第一課長／この学力・学習状況調査の目的や学力について、委員会内でいろいろと議論しているところであるが、この調査で問われるのは、まず、知識・技能、それを活用する能力であり、こういった能力は、子どもたちが、将来、社会を生き抜く上でとても大事なものである。我々公教育に携わる者としては、子どもたちが義務教育を終わるまでに、これらの基礎的なことをしっかり身に付けることが大事だと思っている。

そこで、教育委員会としてできること、学校としてできること、保護者・地域としてできること、というような議論を始めている。具体的には、教育委員会としては、学校へは指導主事が訪問するなどして指導しているが、その共通項目の徹底がなかなかできていない。学校としては、担任が1時間の授業の中で、当たり前かもしれないが、目当てからまとめ、そしてまとめを書くという、今の子どもたちは書く力が足りていないため、最後の45分間、50分間の授業の終わりの5分間は、自分の言葉でまとめるなど、そういう基本的なことを浸透させるためにはどうしていかなければならないのか。また、「家庭学習チャレンジブック」というものがあるが、それをしっかり点検しながら、充実させるにはどうしたらよいか。そういった議論を行っている。

古城委員長／これまでの議論から、北九州市の平均点は全国平均よりも劣っている。このような状況では、将来的に、北九州市の子どもが学校や職業の選択などで、不利益

をこうむってしまうかもしれない。やはり、これは早くどうにかしなくてはならないという理解でよろしいか。

教育委員会においては、学校現場の現状を把握しつつ、いろいろな方策を考えられていると思う。そこで、こういった議論をする場を改めて設定し、今後のことについては、更に議論を深めていきたい。

垣迫教育長／今まで、積み重ねた学力テストの結果、関連するその他の調査の分析結果等、いろいろと議論いただくにあたっての材料がある。また、今回から、各学校において、学力テストの結果を踏まえた分析をして、きちんと保護者に発信することを義務付けているのだが、まずは分析をしっかりとすることが大事だと思う。

そして、先ほど意見が出たように、改めて、意見をいただく場をつくりたいと思う。

私が教育長となってからこの半年の感想だが、何が学力に及ぼす因子なのかと考えたときに、教育委員会、学校のいろいろな仕組みや制度の問題も当然あると思う。それから、教師1人1人の授業力の問題もあると思う。そして、家庭の状況もあると思う。ただし、問題によっては、オープンに議論しにくい、デリケートなものも含まれていることから、議論の場の取扱いについては、検討させていただきたい。

古城委員長／学力向上のためには、子ども、家庭と学校が一緒に取組めるような、例えば、「小学校2年生では、1ケタの足し算ができるようになろう。」といったスローガンを掲げて取組んでいくことが必要なのではないかと思う。

垣迫教育長／冷静にならなければならないのが、例えば、30人のクラスで、29人が70点で1人が0点だった場合、平均点を計算すると、0点1人で2点下がることになるが、それを全国規模で、2点、1点の話をしている。そこもあるので、議論は慎重に行う必要があると思う。

古城委員長／北九州市の得点の分布を見たときに、二極化を危惧するような分布ではないと思っている。皆が平均1問ずつ正答できれば上がる分布で、中間よりも下の層が上がってくれば、全国平均に近づいていくと思う。あまり個々の事象を見すぎると、そこに囚われすぎてしまうことが懸念される。

彌登委員／本市は、体力も低い状況にある。私は、学力、体力ともに低いということが、ものすごく気に掛かっている。どちらかでも全国平均以上にしたいとともに、子どもたちには、「自分はこれについては負けない」というものを、自信をつけさせていきたいと思う。

古城委員長／その両方の基礎として、粘り強さがあるという話を指導部から聞いているので、そういったことも1つの切り口として、今後、議論していければと思う。

報告終了

4 閉会

15:47 古城委員長が閉会を宣言。